てんぐ新聞
'10.6.No157
発行 市岡眞
発行責任者
0883-88-5298

アカリラウビンの鳴き声が聞こえてきたり、あっちこっちにウツギの花が咲きみだれています。あの「うまい」祖谷の山が芽も花も咲きはじめ、地下には新芽が育ちはじめています。

新芽を待っているのは、苦労して畑を耕し、種を植え、肥になる枯草を入れた人間だけでなく、猪や猿、鹿たちも、早くも、手を出しはじめている。苦労(?)しなくて、手に入れられるのだから、これ程よいものがないでしょう。でも、害獣になったのは彼らの生き方ではないはずです。なっと立場を変えたり、目線をさげたりすれば、違ったものが見え、人の勝手

立場や目線で見えるものが違うって

(ツリバナ)

よく見えてきます。同じ花でも、今盛りのウツギはほとんどの人は関心がありません。よく見れば、見事な化粧です。また、こんな事もありました。動物の悲鳴がくよく見ると、ヘビが何かを捕っている。ネズミかとおもえば、ウサギの子供です。おもわず、棒を持ちヘビをたたき、ウサギを助けました、が、もしネズミだったら同じ行動をしただろうか。自分にとって可愛いものは守ぎ、悪いのはヘビやネズミです。

ヘビの食物を人が選ぶことは、人間の勝手です。また、農道にカラスが二羽、近づくと子鹿が、ガアガアから逃げ、立てなくなったカラスにつかれている様子。すぐに、皮が何ヶ所もむけている、動かせば、小さな穴まであいている。助けることは難かしいけど、にくきカラスにつかれるのは気がすすまず、子鹿を見殺し下に逃げてしまいました。これも自然界の中では、あたり前の出来事だけど、人間の感情がはいると嫌いな生き物にはマイナスの行動をしてしまう。

すべてが、人間である生き物の良し悪し

で、殺したり生かしたりしてしまう。

山もそうです。今、鹿が増えて、木の皮をむき、草植物を喜草以外は何でも食べて、裸地化している所も出ている。一方では、登山道以外の山歩きが多くなり、ネットで紹介し、次々と歩くようになり、変化が激しくなっている。どちらも、という自然にとっては、マイナスなのは言うまでもないが、鹿の場合は、「害」ということになってしまう。地球とか自然界にとっては、人間ほど害になるという生き物はないというのに、それを裁く生き物は人間しかいない。「山でいいのだろうか。

農道、林道の多くなれば、この道路を使う、各家から登山しにくくなる。本来の農林以外に通れなくするしかないのか。そこに知恵を出して対策をしないと、人間の勝手ばかりが横行しますんです。

「小さな親切」で「てんぐ」の会表彰うける

一九七〇年代よりはじまった「小さな親切」運動・ボランティア活動のはしりとも言えるこの運動がまで続いていることを知ることにもなりましたが、五月、徳島県本部より表彰されました。

三好市社会福祉協議会及び同協議会西祖谷支所より推薦を受け、この度の受賞となったのですが、大変驚きました。

推せんされてることも知らなかったので、少々な親切運動本部から手紙が届いた時には「何んでやろう」という感じでした。

内容は、アルミ缶集めに協力したり、多くの本を各所に配布したりした事が対象でしたが、これらの事は、お互いに協力しあってなかで成り立つことですから、時別のことではありませんので、これからも機会ある度に様々なことを実行して、祖谷の生活を楽しめればいいなあ、とおもいます。